



夏見台幼稚園・保育園 ニュースレター 2026.7.15 号

園主の鳥居徹也です。夏見台幼稚園・保育園でのこだわりをニュースレターにまとめます。どうぞご覧ください。※配信停止の方はお手数ですがメールまたはお電話でどうぞ(info@trepont.jp まで)

〒273-0866 船橋市夏見台 2-16-1 夏見台幼保園
電話:047-429-7231

「朝読書」の質が変わってきている!?



子どもたちを本好きにする「朝読書」。朝の10分間を使って、生徒それぞれが自分の好きな本（マンガも可）を黙々と読む

取り組みです。とても素晴らしいことだと思います。

この朝読書が船橋発祥だとは知りませんでした。1988年に船橋学園女子高等学校（現在の東葉高校）

で始まりました。キーマンは林広先生と大塚笑子先生。林先生のアイデアを大塚先生が実践し、その効果を全国運動にしていっ

たのです。実は、船橋学園女子高校は荒れた学校でした。生徒の机に「バカヤロー、死んでしまえ」という落書きを見つけた林先生が心を痛み、何とかできないだろうかと模索していました。

そんなときに出会った本が『読み聞かせ この素晴らしい世界』（ジム・トレリース著）。その中に「黙読の時間」の効用が書かれてありました。とても心が落ち着くのだと。「これだ!」

1988年に船橋から始まった!



船橋学園女子高等学校の二人の教師
(現：東葉高等学校)



大塚 笑子
(おおつか えみこ)



林 公
(はやし ひろし)



とひらめいた林先生が職員会議で呼びかけます。

しかし先生たちの反応は鈍いものでした。しかし体育教師の佐藤先生がすぐに実践しました。すると、生徒の欠席率が明らかに下がりました。教室も落ち着いていきました。その様子を目の当たりにした他の先生たちが後に続き、そして全国へ…。

しかし、その朝読書が形骸化しているとのニュースがありました。それはいったいどういうことでしょうか？

本来の朝読書は右の4原則で行います。読書の習慣化と本好きにすることが目的なので、結果を求めません。評価はしないのです。だから生徒は意欲的に読書しました。

朝読書の4原則

- ①みんなでやる
- ②毎日やる
- ③好きな本でよい
- ④ただ読むだけ

しかし教員の世代交代が進み、朝読書の本来の意味が忘れられてきているといえます。その

朝読書の形骸化

- ①教員と一緒に読まない
- ②毎日でなく週1回程度
- ③読む本を学校が指定
- ④アウトプット(評価)

中で最も大きいのが感想文を書かせるなどの「評価」をすることです。評価をされると意欲を失う子

どもが出てきます。本好きにするために始まった朝読書は、退屈な時間になりました。

私はA I時代ほど、読書の意義は大きくなると思います。仮に授業の成績が悪くても、本好きであれば、その子どもはA I時代を乗り切っていけるのではないかと。

小学校での朝読書は、子どもたちを本好きにするための最適な方法でした。少なくとも、就学前の段階では、子どもたちは絵本が大好き、物語が大好きです。その上で、小学校で朝読書が「正しく」行われていれば…。

ただ学校の先生は何かと忙しく、仕事に追われています。子どもたちが静かに本を手にして朝の10分間は、雑用を整理する格好の時間なのです。学校には期待はできません。ご家庭での工夫が求められます。

(終)

ヘレン・ケラーはなぜ「視覚」より「聴覚」を望んだか



ヘレン・ケラーといえば、目が見えない、耳が聞こえない、しゃべれないという「三重苦」の中で努力した偉人です。彼女の残した言葉の中で、私がとても印象に残っているものがあります。それは次のようなものです。

「もし一つの感覚しか持てないなら私は**聴覚**を選ぶ。そうすれば、これほど孤独を感じずに済むから」。

本当にこのようにヘレン・ケラーが話したのか定かではないのですが、有名な言葉として伝わっています。私は「視覚ではないのか…」とつい思ってしまいました。

聴覚は言語と結びつき、言語は思考につながります。思考とは想像力です。目に見えるものは、いってみれば「そのまま」。しかし豊かな想像力があれば、頭の中に広がる世界は、目に見えるものよりもはるかに大きく深くひろがることでしょう。



視覚と聴覚。現代の私たちの生活は**視覚優位**です。スマホやSNS、そしてショート動画。まさに見たままです。想像力は

はふくらみません。集中力も続かなくなっています。

私もショート動画をついだらだらと見てしまっていますが、最近本当に映画を見ることができなくなりました。2時間が耐えられないのです。困ったものです。

そこで聴覚の重要性が出てきます。想像力は人間の持つすばらしい能力です。アウシュビッツ収容所生き残った人の話を読むと、「ナチスは我々からあらゆるものを奪ったが、想像力だけは奪えなかった」とあります。その最後の力を使って、明日への希望を思

聴覚＝言語＝思考

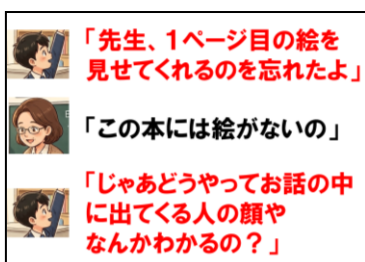
想像力



い描き、生きながらえたのです。

その想像力、すなわち生きる力を子どもたちにどう育むのか？これは教育の果たす大きな役割です。そこでこの本。本の中にこのようなエピソードが出てきます。

小学校でクラスの全員に本を読み聞かせている先生。1ページ目を読み終わり、2ページ目に移ろうとしたそのとき、ある生徒が次のように言ったのです。左図をご覧ください。



耳から言葉を聞いて、その言葉をもとに頭の中に絵を描くのです。それが想像力です。言葉は記号です。抽象的なものです。それを具体的なモノに変換していく力を養うこと。読

書の効用の一つです。

ここで幼児教育の話になります。「**絵本歴**」という言葉。絵本とどのように関わってきたかということです。0歳では絵本は読みません。絵カードを示して言葉とその絵をつなげていきます。



その後、絵本の読み聞かせが始まりますが、年齢が進むにつれて、集団は大きくなり、絵本の中のイラストも少なくなっていくます。



さらに5歳になると「素話（すばなし）」が始まります。絵本なしでのお話し会です。子どもたちは耳から入ってくる言葉を、頭の中で絵に転換します。

物語を語り聞かせることで、子どもの想像力を豊かにできるのです。ぜひご家庭でも、読み聞かせをやってほしいものです。それは小学校にあがっても継続してほしいと思います。

(終)